道路ユーザーネットワーク広場

NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK

☆三好礼子の☆ ナチュラル・ロード

STY優勝のセバスチャン・セニョは大好きな友人。レース後、何故か握れた私の手に注目！

三好礼子
エッセイスト・国際ラリースト
～ http://www.fairytale.jp/ ～

道路ニュースで連載が始まった2009年直後にモンブランの「UTMB」という100マイルレースの影響でトレイルランニングを始めた私は、その多くを「自分の足で地球を走る面白さ」を夢中で紹介してきました。特に「UTMF（ウルトラトレイル・マウント・フジ）」という富士山を一周する100マイルレースの実行委員になってからは、開催に向けてのコース探しや地権者交渉、整備にゴミ拾いにボランティア探しに4年を費やし、それがあまりに面白かったので随時紹介。山梨と静岡の2県に跨がり、10以上の市町村を通過し、ボランティアの数は選手2千人とほぼ同等という日本一の規模だったので、苦労も楽しさもメガトン級。拾ったゴミが年間で軽トラ15台分だったり、古道を復活させて道無きところに道を作ったり、専門家に話を聞いて植生調査をやったりと、年間山に200日入るという生活は、希有な体験でした。残念ながら引っ越しを機に実行委員を降りたので、今度は選手でエントリー。この9月25～27日に走ってきました♪

スタート直前。限りなく前に並んだことが、関門突破の切り札だったかも？

太郎坊エイド。ビデオ撮影しながらのラン。STYとの混走は楽しかったが、ここから先は眠気地獄。

私は生来の晴れ女。しかし当日は、大会初めての雨がしとしとずっと降り続き、終始泥濘みの中をゆく泥行軍となりました。泥濘みは嫌いじゃないけれど、あちこちで渋滞となり、泣きが入ります。レース中に関門時刻が延長されたお陰で続行できましたが、やはり自然には勝てませ～ん。あとで知ったのですが、予想以上の渋滞で、700人もの選手が70キロ地点の富士宮エイド（かつての担当）の関門に間に合わずリタイアしたそうです。私もそこはギリだったので、何年も苦楽を共にしたボランティアたちが次々声を掛けてくれるのですが、涙の再会どころか「ゴメン！時間ない！」。アチラも「うん、とにかくガンバ！」と握手もままならず。寂しい～。その後は山場を越えたので、仮眠を取りつつも、なんとか制限時間一時間半前の44時間26分でゴールすることができましたが、「自分で創りあげたレースでリタイア」にならず、ほっとしました。しかし雨などアクシデントがあった時の予想は、改めて難しいと痛感。伸びれば何千人という警備や警察やボランティアの方に迷惑がかかり、延ばさないことが最良の選択な中での関門延長2カ所。運営も大変なことだったでしょう。選手も憤りも分かり、課題は今後へ活かされることを切に願うばかり。

無事ゴール！ サポートしてくれた大野さん夫妻もまた不眠不休でのサポート。思わず完走ベストを譲渡しました♪

今回は悩んだ末、トレラン仲間の大野さんにサポートをお願いしたのですが、これがなくてはおそらく完走は無理でした（断言）。泥濘みは思ったより身体を消耗させ、エイドに着く度に、放心状態。食べ物を用意してもらい、Tシャツとシューズを替え、必要なことを処理して再スタートするのですが、思考回路と動きはバラバラ。処理能力がすこぶる低下した中、おんぶに抱っこ状態でした。今回は、日本のレースだったので、すいとん、うどん、ソバ、ご飯、パン、お餅など、エイドにある炭水化物はほぼ完食。だし汁も最後までですすりましたが、サポートには、メロン（一個半ぺろり）と梨、ヨーグルトやカステラやなどを用意してもらったので、レース中の補給がいらないくらい充実していました。気持ちよくエイドを出て、安心して帰ってくることの贅沢さ＆有り難さ。選手を苦しめた泥濘みは、足の痛みとなって辛かったし、激しい睡魔との闘いになりましたが、雨のお陰で気温も一定で、熱射病にも低体温症にもならず、ある意味快適な道中となりました（やっぱりツイてる？）。

気になるコースですが、春から秋開催になったため、ボランティアさんたちの草刈りの苦労が忍ばれ、こちらも「ありがとう」を連発。以前は駄目だった市道が夜間通過で通れる様になっていたり、もっといい道が許可されていたり、そして新しい自衛隊の道も素晴らしい環境でした。ゴミも僅か。楽しかったのは、途中でコースが重なるのでトップからラスト選手までの走りを見ることができたSTY（80キロクラス）千人との混走。まだ元気な人たちなので、UTMFの選手はみな道を譲ります。その時に「頑張ってね」と声を掛けると、なんと100%返事が返ってきました。「ナイスラン」「そっちの方が凄いよ～」「ありがとう」と言われ、こちらも元気に！ UTMF同士でも声を掛け合って山を越えていきました。眠気防止にシリトリした人、暖かい珈琲分けてあげた人、顔は見えないけれどたくさん話した人、みんな覚えています。リタイアした選手とも話をしましたが、誰もが黙々と自分の道を進んでいました。レース中はまったく富士山は見えなかったのですが、たくさんのシーンが心に残っています。トレイルというより、人の縁という道を走ったのかも。1070・3キロ、累計標高7889メートル。完走率は41・5%。「UTMF」、これからも深い関係は続いていくと思います。

桑沢デザイン研究所の卒業生が集まった大野さんの仲間。彼らもあちこちで力強く応援してくれました。ありがとう！

博多商人の心意気「誓文払い」

フリージャーナリスト
湯浅玲子

全国各地にある商店街はさまざまな商品を揃え、昔から人々の暮らしを支えてきました。その起源は古く、安土桃山時代の楽市・楽座にまで遡るそうです。江戸時代には街道沿いに発達した宿場町や、寺院などが集まる門前町など、人馬の往来が多い通りに自然に店が集まって商店街が形成されてきました。

博多にも古くから博多っ子たちに親しまれている川端通商店街があります。およそ400メートルのアーケードに約100軒の店が並び、近くに寺社仏閣や商業施設などの観光名所が多いことから、休日には多くの買い物客で賑わいます。この川端通商店街で毎年11月中旬に行われるのが「せいもん払い（誓文払い）」。お客様への日頃の感謝の気持ちを込めた、掛け値なしの大安売りです。

博多の誓文払いは、下川端で漬物店「金山堂」を営んでいた八尋利兵衛（やひろりへい）が始めたものです。利兵衛は14歳から博多の呉服店で修行をし、30歳のときに自分の店を持ちました。たいへんなアイデアマンで、人を呼び込むための斬新なアイデアを次々に発案していったのですが、誓文払いもそのひとつです。

利兵衛が商用で大阪に出かけた際、蛭子市（えびすいち）の誓文払いが大繁盛しているのを見て、「何とか博多でもこの賑わいが再現できないか」と考えました。利兵衛は博多の呉服商に合同での大売り出しを呼びかけましたが、当時の大売り出しといえば店が倒産したときに行うもの。縁起でもないと交渉は難航しましたが、何とか27店の協力を取り付けて1879（明治12）年暮れに初めての「誓文晴れ」（せいもんばれ＝当時の名称）を実現します。

知恵を絞った利兵衛の広告宣伝の効果もあり、今のようなバーゲンがなかった明治時代の大安売りは大成功。その後は年々規模を大きくし、さまざまな業種が参加するようになりました。戦時中の一時期をのぞいて、誓文払いは現在まで続いています。もともと川端通商店街だけで行われていたのですが、戦後は他の商店街にも広まっていき、今では百貨店なども参加する「福博せいもん払い」として市内各所で盛大に行われています。

漬物商だった利兵衛は、呉服の大売り出しである誓文払いでは一銭のもうけもありませんでした。それでも地域全体、通り全体が賑わうことを目指して実施したのです。利兵衛の博多商人らしい心意気は、赤字覚悟の大売り出しとして今でも受け継がれています。

（写真提供：福岡市）

多くの買い物客が押し寄せる川端通商店街の「せいもん払い」

商店街名物の「川端ぜんざい」は昔ながらの懐かしい味わい

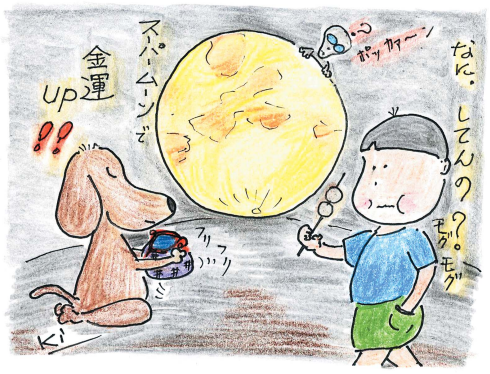
ハッと思いました

一人のドライバーとして最近思う事があります。それは、「アクセルとブレーキの踏み間違い」と「高速道路の逆走」が頻繁に発生し悲しい事故が多発している事です。どうしたらそのような状況になるのか、中々理解できないのです。

踏み間違いに関しては、クルマの変速機がオートマチックになり、ペダルが二つになっている事、誰でも簡単に操作できるようにと開発されたイージードライブの結果ではないかと思っています。そもそも大陸の長距離走行が主流のトルクフルなアメリカ車に採用されクルマの普及を加速させたものだと考えられます。

日本では昭和三十年頃、二輪車に始まり、四輪車へと採用されています。四十年程前は、オートマチックはまだ限られたもので、クラッチ操作を必要とする3ペダルが主流でした。運転が簡単になった分、一層回りに注意を払う事ができるはずですけど・・・。

高速道路の逆走に関しては、ドライバーの注意散漫と思い込みが原因の何ものでもないでしょう。



兎にも角にも、ドライバーの教育、ドライバーの自己責任がキーポイントに間違いありません。

そこの所を疎かにして、クルマの安全装置の開発や自動運転の実現などに偏ってしまうことに、少々脅威を感じてしまいます。

アナログ世代から抜け出せない私にとっては、時計もクルマもシンプルが一番です。

そんな思いもありながら感動していることもあります。それは、九十歳を過ぎた父が未だにクルマを運転している事です。田舎の事ですから、病院やらちょっとした買い物など、月に何度かは自ら運転して出かけているようです。五十年以上前からのドライバーですが、当時から現在に至るまでずっとマニュアル車に乗っています。きっと、現代の都市部では危なくて（本人も回りも）運転できないでしょうが、ある意味、田舎生活での必要に迫られて必要だった、いや、今も必要なのです。

隠しきれない運動能力の低下をそっとカバーしてくれる装置が、現在ある事には感謝していますが、父の愛車にはそう言ったモノは何一つ装備されていません。でも、事故もなく過ごしている事に尊敬し感謝するばかりです。

傍若無人なドライバー、自転車達よ。まじめに真剣に運転し走れば、便利で楽しい日々が長く続くのですよ。お分かりかな?!